

寺田寅彦著「柿の種(Ⅱ)」岩波文庫、岩波書店 1996年4月16日刊を読む

1. ある日。

汽車のいちばん最後の客車に乗って、後端の戸口から線路を見渡した時に、夕日がちょうど線路の末のほうに沈んでしまっていて、わずかな雲に夕映えが残っていたので、鉄軌がそれに映じて金色の蛇のように輝き、もう暗くなりかけた地面に、くっきり二条の並行線を劃していた。

汽車の進むにつれて、おりおり線路のカーヴにかかる。

カーヴとカーヴとの間はまっすぐな直線である。

それが、多くは踏切の所から突然曲がり始める。

ほとんど一樣な曲率で曲がって行つては、また突然直線に移る。

なるほど、こうするのが工事の上からは最も便利であろうと思って見ていた。

しかし、少なくともその時の私には、この、曲線と直線との継ぎはぎの鐵路が、なんとなく不自然で、ぎごちなく、また不安な感じを与えるのであった。

そうして、鉄道に沿うた、昔のままの街道の、いかにも自然な、美しく優雅な曲線を、またなつかしいもののように思ってながめるのであった。(大正十三年一月、渋柿)

2. 震災後、久しぶりで銀座を歩いてみた。

いつのまにかバラックが軒を並べて、歳暮の店飾りをしている。

東側の人道には、以前のようにいろいろの露店が並び、西側にはやはり、新年用の盆栽を並べた葎簀張りも出ている。

歩きながら、店々に並べられた商品だけに注目して見ていると、地震前と同じ銀座のような気もする。

往来の人を見てもそうである。

してみると、銀座というものの「内容」は、つまりただ商品と往来の人とだけであって、ほかには何もなかったということになる。

それとも地震前の銀座が、やはり一種のバラック街に過ぎなかったということになるのかもしれない。(大正十三年二月、渋柿)

3. ルノアルの絵の好きな男がいた。

その男がある女に恋をした。

その女は、他人の眼からは、どうにも美人とは思われないような女であったが、どこかしら、ルノアルの描くあるタイプの女に似たところがあったのだそうである。

俳句をやらない人には、到底解することのできない自然界や人間界の美しさがあるであろうと思うが、このことと、このルノアルの女の話とは少し関係があるように思われる。

(大正十三年三月、渋柿)

P72 ~ 75

<コメント>

寺田寅彦は漱石の紹介で正岡子規の下で俳句にも親しみました。

2021年8月7日(土)林明夫